



江藤淳と少女フェミニニズム的戦後

サブカルチャー文学論序章

大塚英志

江藤淳と少女フェミニズムの戦後

サブカルチャー文学論序章

筑摩書房

大塚英志

【著者紹介】

**大塚英志** (おおつか・えいじ)

1958年、東京生まれ。

## 江藤淳と少女フェミニズムの戦後

——サブカルチャー文学論序章

2001年11月10日 初版第1刷発行

著者——大塚英志

発行者——菊池明郎

発行所——株式会社筑摩書房

東京都台東区蔵前2-5-3 郵便番号111-8755 振替00160-8-4123

印刷——三松堂印刷

製本——積信堂

© EIJI OTSUKA 2001

ISBN4-480-82347-6 C0095 Printed in Japan

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが下記に御送付下さい。送料小社負担にてお取替致します。  
ご注文・お問い合わせも下記へお願いいたします。

〒331-8507 さいたま市蕨引町2-604 筑摩書房サービスセンター 電話048-651-0053

江藤淳と少女フェミニズムの戦後——サブカルチャー文学論序章

目次

序章 犬猫に根差した思想 5

第一章 サブカルチャー文学論・江藤淳編 13

1. 「ツルリとしたもの」と妻の崩壊 14

2. 「母を崩壊させない小説」を探した少年のために 48

3. 江藤淳と少女フェミニズム的戦後 60

第二章 江藤淳と来歴否認の人々 103

1. 三島由紀夫とサブカルチャーとしての日本 104
2. 手塚治虫と非リアリズム的「日本語」の可能性 124
3. 江藤淳と来歴否認の人々 140
4. 柳田國男と「家」への忸怩<sup>じくじ</sup> 159
5. 村上春樹と村上龍の「私」語りをめぐる 178

終章 「歴史」と「私」の軋<sup>き</sup>む場所から 195

装丁 鈴木成一デザイン室

## 序章 犬猫に根差した思想

### 1

江藤淳が「文學界」で「幼年時代」という題名の連載を始める、と編集者から聞かされてあまり良い気がしなかったのはそれが堀辰雄の小説の題名とかぶっていたからだ。無論偶然の一致ということもありうるが、けれども江藤淳がかつて「昭和の文人」で堀辰雄の「幼年時代」を手厳しく批判しており、それが江藤の批評の根幹に関わるものであるという印象をぼくは持っていたので「幼年時代」という題名を選択したことが妙な言い方だが彼を追いつめなければいい、と思っていた。

などと書いたところで後付けのようにはしか聞いてもらえないだろうが「幼年時代」の第一回目を読んでそれが「江藤淳」の自伝でも本名である「江頭淳夫」の自伝でもなく架空の「江上淳夫」についての自伝であったことにまず困惑した。まったく関係ない連想かもしれないが梶原一



騎の最後の劇画「男の星座」が梶原一騎のでも高森朝樹のものでもなく架空の人物「梶一太」を主人公とする「自伝」であったことを思い出してちよつといやな気がした。梶原のように虚実を合わせ吞むように生きた人ならいざしらず、夫人を亡くしたばかりの江藤淳にそれは苛酷な作業になるのではないか、と危惧せざるをえなかったのだ。

江藤は「昭和の文人」の中で堀が自らの出生にまつわる父母の記憶を曖昧化していることを手厳しく批判している。「幼年時代」において堀は自分が養子であり父の子ではないことを隠し「父はずつと横浜の方に行つたきりで」「私には殆ど何の記憶も残してゐない」と記している。しかし江藤はそれをヘフィクションの許容する範囲を「遙かに越え」て文学的な「嘘」をついた、と批評して、こう記す。

へしかし、もし仮りにそのような仮構が成立し、文学的にも正当化され得るとすれば、堀辰雄はたちどころに「堀辰雄」以外の何者かに変身して、堀濱之助の子でも上條松吉の子でもなくなり、いわば任意の父の子となることができる。

その時、作者は、複雑な出自の重さからはじめて解放されて、虚構の保証する時空間の中に望むままの擬似的な人生を夢見ることができると。

（江藤淳「昭和の文人」）

そう記した江藤が江上淳夫が主人公の「幼年時代」を書き始めた。それは江藤ファンにしてみればひどく危ういふるまいだった。最後の原稿を受けとった編集者によれば「幼年時代」への抱負を「今までは概念で書いていたところを、描写で書く」と語っていたということだが、それは

堀辰雄的な「曖昧さ」を一切、排するという決意にもとれる。だが同時に江藤淳という仮構ではなく江上淳夫という更なる仮構をもう一人「幼年時代」は必要とした。そのことはやはり「任意の子」となることや「虚構の保証する時空間の中に望むままの擬似的な人生を夢見る」ことにごく崩れていく可能性を秘めてはいなかったか。

江藤淳は自分の生年を何かの折に誤って記載されたのを敢えてそのままにしていた、という。江藤淳とは仮構である、というのが彼の自己設定であり、しかしその「仮構」が「任意の子」となることを江藤は拒み続けた。江藤淳という批評家を理解する重要なキーワードだが、江藤は自らを「仮構」として設定しながら、しかし現実逃避することを同時に拒んだ。甘美な仮構に閉塞するものを半ば近親憎悪的に酷評した。堀辰雄も福田章二（庄司薫）も、そして「戦後」という言語空間も甘美な仮構であるが故に批判されたのだといえる。

けれども江藤淳が江上淳夫を必要としてしまった、ということとはやはりどこかで彼が堀辰雄的なところに崩れ落ちていききつかけとなりはしなかったか。ぼくは身近な編集者たちに「本当に江藤淳を大切に思うのなら『幼年時代』なんか書かせないで、大江健三郎について土下座してでも書かせるべきだ」と言っていた。子供時代のことにはなく「戦後文学」にきっちりとかたをつけようという仕事を見たかった。結局「幼年時代」は始まり、そして、「仮構」としての江藤淳を自分で始末してしまった。仮構を批判し続けた彼は、最後に仮構としての自身を葬ることで批評家として筋を通したのだ、といえる。けれどそれは正しい選択ではやはりなかった、と記さず

にはいられない。

いくつかの江藤の死について書かれたものを目にしたけれどやはり福田和也が「朝日新聞」に書いたものが群を抜いていた。その最後に国旗・国歌法案の可決に言及しへこのようにイカサマな手続きで、でっちあげられていく「国家」など、江藤氏は決して認めはしなかつたろう」と、とうとう彼は記してしまった。一部の自称保守の人々の怒りを買っているようだけれど江藤の「仮構」に対する厳しさをちゃんと読みとつていけば「産経新聞」の社説のように国旗・国歌法案を江藤の死の手向けにしよう的な発想は出てこないはずだ。そういう「保守」と江藤は違つたんだ、と「朝日新聞」で福田和也が書かなくてはいけない世間の倒錯ぶりがどうにも悲しかった。江藤の死については他に吉本隆明が「文學界」に書いた文章の中で「妻と私」の中で江藤の愛犬についての記述がないことが気になつて、と記しているのが目にとまつて、それでちよつと救われた気がした。江藤の文学の中で「犬」が占めてきたどうにもやりきれない位置を吉本隆明はちゃんと気にとめていた。福田和也とか吉本隆明とか、それから追悼文の顔ぶれにはなかつたけれど上野千鶴子とかが「理解」していた江藤淳がほくは好きだつた。

大江健三郎が小説に復帰し石原慎太郎が都知事になつて江藤淳が自死しなくてはならない、というのはどうにもばかげた時代だ、という気がするけれど。

吉本隆明さんのところに江藤淳について話しに行った。吉本さんのお宅にうかがうのは初めてで、庭先の段ボールの上には猫が寝ていて、それから玄関口の土間には猫の御飯のお皿があった。死んだ猫をこっそりと隣のお寺に埋めに行ったことはエッセイで読んだ記憶があつたけれど猫がうろうろとする家を見て、やはり猫を飼うほくは多分、評論家としては江藤さんよりは吉本さんに近いんだろな、と何となく思った。いや、そんなふうに彼らと自分を簡単に一緒にしてはいけないのだろうけれど吉本さんの強さと江藤さんの脆さというのは猫か犬かという問題と少しは関係あるように思う。

論壇のことを書くコラムだと言っておいて犬や猫の話もないだろう、と思われるかもしれないがやはり論壇誌においても今月は犬や猫であつたのだ。前の文章で確かばくは江藤淳の『妻と私』の中であずけられたままの犬の行方について気にしているのは吉本さんだけだ、と書いた。すると『文藝春秋』に掲載された江藤淳の姪ごさんのエッセイの中に犬の行方についての記述があつた。結局、犬はもらい犬に出してしまつたようだ。

へ駅のガード下を浮かぬ顔をして歩いて、手には包帯をまいている。わたしのことを気がつかないんですね。タクシー乗り場に歩いていくおじさまをつかまえて、どうしたんですかと訊いたら、実はメイちゃんに噛まれてね……と。四月の終わりぐらいます。獣医さんに相談して、あの子を残しておくのはセンチメンタリズムだと言つて、そんなセンチメンタリズムはもう捨てたほうがいいんだとおっしゃつて、お嫁に出してしまつた。)

(府川紀子「可哀相な、おじさま」)

上手くはいえないんだけどそのままずるとだらしなく犬と暮らすようなところがあれば江藤淳は死ななかつたんだろう、と思うと同時に、犬を選んだ段階でそれはある種の潔癖さの現われみたいなどころがあるから、老犬と老いていくという人生はやはり江藤淳にはありえなかつたのだろうなとも思う。犬と暮らすセンチメンタリズムを断念した江藤がけれども「幼年時代」というセンチメンタリズムに崩れていつてしまったのはどうにも痛ましいが、そんなふうな退路を断ってしまうのが江藤淳の思想だつたのだから仕方がない。そして犬の行方を気にしていた吉本さんはやはり数少ない江藤淳の理解者だつたのだと改めて感じた。

『文藝春秋』の翌10月号には少女まんが家の大島弓子がガンを告白するエッセイまんがを発表していて驚いた。天皇陛下御執筆原稿と大島弓子が同じ目次に並ぶのも考えてみれば不思議な光景だけれど、それよりも大島弓子がガンと闘病している、というのはショックであつた。

大島弓子というのはぼくにとつて江藤淳や吉本隆明とは違う意味で特別な作家である。公園近くの今の仕事場所に移つてきたとき最初にやったことは大島弓子のマンシヨンの近くまでいつてサバが歩いていないか捜したことだつた。サバ、というのは当時、大島弓子が飼つていた猫で、ある時期から彼女はこのサバとの暮らしをエッセイともまんがともつかぬ形の作品で書き続けていた。近所に住んでいた女の子の社会学者も「同じことをしたよ」と言つていた。大島弓子が世界のどこかでサバと暮らしている、ということはぼくたちにはとても大切なことだつたのである。

何年前か前、サバは死んで一体大島弓子はどうなつちやうだろうと勝手に心配していたら新し

い猫を飼い始めて、また新しいエッセイまんが「グーグーだつて猫である」を書き始めた。そこでファンであるぼくがほつとしたのは大島弓子が新しい猫グーグーを猫の姿に描いていたことだ。それまで大島弓子のまんがではサバは人間の姿で描かれていた。みけんにちよつとしわを寄せて、いつも大島弓子と対話をしていた。それはまるで彼女の世界がサバによつて支えられているかのようにも思えて、つまり、だからファンとしてはサバが逝つたらどうなっちゃうんだろう、と心配だつたのだ。けれども新しい猫はただの猫として描かれていて、その擬人化されていない猫の絵が大島弓子がサバの死を通して乗り越えたものが何だつたかを物語っているように思えた。こんなふうを書いていいのかわからないけれど、それは江藤淳が乗り越えられなかったものではないか。犬をただありのままの犬として飼うことを江藤淳はやはり受け入れられなかったように思うのだ。

ガンを告知された大島弓子は思ひのほか、淡々としていた。入院する前に彼女がまずしたことには二匹の猫（一匹ふえている）の面倒を友人に頼むことで、彼女は手術で自分に万が一の事がおきたら自分のマンションをあげるので猫の世話をしてくれと頼み、遺言状を書く。大げさと思われるかもしれないが彼女のガンは第三期だと後にわかるのだ。

手術は成功し、化学療法入院を経て大島弓子は退院するのだが、ガンとの闘病記のわりにはこのエッセイまんがは余りに淡々としている。確かにまんがの中の彼女はショックを受けたり右往左往しているのだけれど、その日常はとても安定している。なんというか、ひどく強いのだ。そ

れはちようど「妻と私」「幼年時代」の脆きとも対照的である。

けれども愛する対象を失つて自らも病に倒れる、という体験を経た一人の批評家と一人の少女まんが家の脆さと強さの質はとても大切な問題だと思う。その強さを江藤淳ではなく大島弓子が持ちえたことはサブカルチャーという領域のある可能性のようにも思えるが、それは話が大きくなるのでやめる。

ただ犬猫に根差せない思想というのをぼくはどこかで信じていないのである。

そのことだけは記しておきたい。

第一章 サブカルチャー文学論・江藤淳編



## 1. 「ツルリとしたもの」と妻の崩壊

若い日の江藤淳の書齋（といっても2DKのアパートの一室である）にはペンギンのぬいぐるみがあったという。「三匹の犬たち」の冒頭にそう書かれている。ペンギンは「ジジ」と名付けられ「梶井基次郎全集」と「坂口安吾選集」の間に置かれていた。ある日窓の外で遊ぶ近所の子供たちがそれを発見したらしいことに江藤は気づいた。江藤は「ちよつといたずら気を出して、子供たちに気づかれないように「ジジ」の足をとりあげると、彼のくちばしをチョコンと回転窓の外につき出」してみせる、という悪戯をする。

へギクリとしたらしい気配がして、子供たちは窓からとびのいた。そして、口々に、

「ペンギンのおじさんだ、ペンギンのおじさんだ」

といいながら逃げていった。

ペンギンのおじさんか、とつぶやきながら久しぶりで「ジジ」を机の上ののせてやると妙な気がして来た。こうやって本の餌を貪りながら狭いおりのような場所にうずくまっている私などは、